ハンガリー　　2002（平成１４）年
日本人会会報　　夏季号

ドナウ通信

No.　５２

目　　次

特集 - 『ハンガリーの生活』

「とんだ披露宴」　村山　　裕　２
「まいったな！ハンガリーには」　高根　友光　６
「冬から夏へ」　太田　智子　８
「結婚式＆子育て事情」　山口　　晃　１０
「初めての海外勤務」　大石　　守　１２
「ブダペストに暮らしてみれば」　賀澤　啓子　１６
「子連れハンガリー滞在記」　野村　敬子　１９
「ハンガリーで病院にかかる術」　森下　恒治　２２
「ハンガリーとアメリカ：生活を比較する」　二村　修／手島　浩平　２６

補習校便り

「漢字を知ると、どんなよいことがあるの？」　吉原　稔祐　２９

補習校夏合宿　３１

小学五年　太田　祥子　　小学五年　細川　萌里
小学五年　山崎　勇祐　　小学五年　横山　ゆか
小学六年　小野田　陽　　小学六年　上坂　　桃
小学六年　清水　郁馬　　中学一年　野沢　太郎
中学一年　村松　佳奈　　中学二年　太田　寛朗
中学二年　近藤　麻実　　中学二年　手島　慎平
中学二年　塘　将太郎　　中学三年　糸木　　悠

書籍紹介

『「無限」に魅入られた天才数学者たち』　盛田　常夫　３７

日本人会運動部報告　「ソフトボール奮戦記」　田村　敏展　４０

日本人会遠足レポート「見てきました！ハンガリーの原点」
野沢　正之　４４

日本人会より・編集室より　４４

特集 ハンガリーの生活

とんだ披露宴

村山　裕

私共　Clarion　Hungary Electronics Kft. はカーステレオの基板アッセンブリーを生産し、最終工程を担う当社のフランス工場へ供給しております。従業員は現在七五〇名、生産量はＥＭＳを含め年間一二〇万台規模です。

一九九八年一二月の操業開始より幾多の問題を解決しながら、やっと安定期に入ったと言えます。

ドナウ通信への寄稿を委された私は立ち上げより駐在しています村山四一才です。れっきとした独身で、ハンガリーで嫁さんを見つけろとうるさく言われ困惑しております。

以下私の初めての海外駐在記を簡単に紹介しますので、ご一読下されば幸いです。途中の注釈の駐在員談はあまり気にしないでください。

赴任まで

「村山君、ハンガリーに行ってくれ！」。日本で勤務していた時の上司の一言で私とハンガリーの付き合いが始まりました。元々、何度か海外出張を経験していたこともあり、特に驚きはなかったものの、やはり初めての海外駐在とあって不安が全くなかった訳ではありませんでした。恥ずかしながらハンガリーという国の名前は知っていたものの、正確には何処にあってどんな国なのかすら分からなかった始末でした。

工場の設立の準備で、新しく設置する機械の検証やらローカル一期生の研修の世話やらで、慌しく半年の時間が過ぎハンガリーのフェリヘジ空港に降り立ってしまいました。九八年一一月のことでした。

我社の工場はブタペストから東へ六五キロの所にあるナジカータ（Nagykata）という小さな村（公式には市です）に建設され、初めて来られる方は周りの風景から見れば非常に場違いな建物の印象を受けるのではないかと思います。

赴任してきて数ヶ月は工場立ち上げの忙しさに追われ、住む家もなかなか決まらずホテル暮らしが続きました。ホテル暮らしは時期的にも真冬の一番寒さが厳しい時でそれは辛い生活でした。ナジカータから西に一六キロのところにあるヤースベレーニ（Jaszberenyi）という所のホテルでしたが暖房もろくに効かずテレビもなく〔私の部屋は、、〕悲惨な状態でした。九九年ニ月のハンガリーの大雪の時も、私の田舎は福島の郡山と言うところで大雪を何度となく経験しているので、さほど驚きませんでしたが、気温が下がり、樹氷

やダイアモンドダストを見たときは改めてハンガリーの冬を思い知らされました。

（※本人は郡山市出身と言っていますが、実はそこから一二キロ先の三春町生まれの田舎者です…別の駐在員談）

住まいのこと

やっと、住む家が決まったのは年も明けて四月のことでした。初代駐在員は社長も含めて一〇人中、七人は年が明けると早々にブダペストに住居が決まりましたが、私の担当が自動機二四時間稼動の維持管理監督ということもあり、トラブルの際にはいつでも駆けつけられる様にと地元のナジカータ（私を含めて三人）に住むことに決めました。家賃に関してはここで敢えて触れないでおく事にしますが、当時はやっと見つかった家ということもあり納得しましたが、今振り返ってみればもう少し交渉すべきだったかもしれませんとだけ書いておきます。とはいえ、分けの判らない外国人に貸して下さった大家さんには大変感謝しております。

そんなこんなで人間の生活三要素、衣食住の内の“住”が決まったところで、ナジカータ市について少し紹介しておきます。

前述しましたがブダペストから東へ六五キロのところに位置し人口一万二千人程度の小さな街です（日本の市には程遠いです）。元々は主に農業と酪農で生計を立てておりましたが、ブダペストから直通の電車の路線があり、最近ではブダペストへの通勤圏内となりつつあります。現に我社にもブダペストから電車で通勤している駐在員がおります。街にはこれといった観光スポットもなく、普段は静かな佇まいです。

唯一の目玉は温泉が湧き出た温水プールがあり、五月から九月には沢山の人で賑わっているみたいです。「みたい」というのは今だかつて一度しか行ったことがなく、しかも閉館時間を過ぎて無理に入れてもらった為、実際の賑わいを見たことがないからです。はっきり言って、恥ずかしがり屋の私にとっては唯でさえ辺鄙な田舎町で珍しい日本人が、温泉プールで裸になり好奇の目に晒されるのは耐えられないことです。

（※クリスマスパーティーでは社員の前で喜んで裸踊りを披露するのに？…全社員談）

生活面からすれば居住地がブダペストから六五キロという距離については賛否両論といったところでは無いでしょうか。まるっきり大都市から離れた場所であれば諦めもついて地元に密着し、それなりに生活する分、交流が深まり地元の人々のことを理解できるチャンスが増えると思いますが、六五キロは車で約一時間余ですので、行こうと思えば休日に

買い物に行ける距離ですし、毎日車で通勤している駐在員もおります。その分地元との交流も薄くなっているのは事実です。ナジカータ在住三年になりますが、今だかつて地元住民とは仕事関係を除いて数える程しか言葉を交わしておりません。全く寂しい限りと反省しております。

（※ホントに？怪しい行動してない？…ナジカータ在住の駐在員談）

食生活のこと

次に私にとって命より二番目に大事な食生活について紹介します（※糖尿も省みず、甘い菓子を食べまくっている…全駐在員談）。

ハンガリーに来て先ず初めに口にしたのはお約束のグヤーシュスープでした。その時の印象は辛くて、しょっぱかったことが未だ記憶に残ってます。そのせいか口にする物全てが辛い、しょっぱいという潜入感が暫く続き、このままの食生活では高血圧気味の私は命の危険さえ感じました。それを救ってくれたのは、年三回日本から送られてくる支援物資でした。支援物資というと大げさに聞こえますが簡単にいえば会社で提供しているカタログ販売のようなもので、必要な食材や生活用品をオーダーすると日本から発送してくれというものです。勿論、オーダーする物は食材のみというのは言うまでもありません。第一回目に送られてきた時は何故か嬉しくて涙が込み上げてきたのを今でも忘れません。

それからというものベダペストにある日本食材屋さんを知ったり、スーパーの食材を選べるようになったりして、いまでは殆ど日本食の毎日になっております（※羊羹やらキャラメルコーンばっか注文している様だ…駐在員食糧庁長官談）。

独身の私は、日本で生活しているときから自分で料理することが多かったので苦にはなりませんでした。単身赴任されてきた方の中には、料理の腕が上がったり、レパートリーが増えたりで奥さんの苦労が身にしみて分かったりした方が少なくないのではないでしょうか。ここでワンポイントアドバイスです。これをお読みになっている方で納豆が好きな方がおられると思います。刻んだ長ねぎは勿論入れるでしょうが、ここに砂糖を一振りかけるとコクが出て美味しくなるのをご存知でしょうか。また、醤油の代わりにそばつゆか、すき焼きのタレをかけてもより美味しくいただけます（※三春町の定番です…本人談）。

日本食のことばかり書きましたが、ハンガリー料理もまったく食べない訳ではありません。ナジカータにある数少ないレストランの一つに行きつけのレストランがあります。時々、ここでナジカータ在住の駐在員三人で食事をすることがあります。そこの女将さんが気のいい方で片言の英

語で応対してくれます。そこのグヤーシュスープは絶品ですので、ナジカータへお越しの際には是非お立寄りください。また、このレストランで主催するグヤーシュパーティへは年一回会社を挙げて参加しています。これは何組かに分かれて自慢のグヤーシュスープを作り、食べ比べるというものです。最初に招待された時、我々日本人チームとしてはトン汁をひっさげて参加しましたが、審査員特別賞に終わってしまいました。昨年は何故か巻き寿司で参加しましたが、これがまた好評で、あっという間になくなりました。催し物とは主旨の違う巻き寿司では優勝できなかったのは言うまでもありません。驚いたのはグヤーシュスープの作り方です。牛肉を鍋に入れ、何と五時間以上も煮込んでおりました。午後から始まり七時の表彰式の時も煮込んでいるチームがあった程です。グヤーシュスープのあのコクの深さの秘密が分かったような気がしました。

生活習慣のこと

日本からすれば地球の裏側で歴史も言語も考え方も全く違うなかで生活習慣が違うのは当然のことながら改めて認識させられるエピソードがあります。

私が担当する部署は人数が多い為、年一回か二回は結婚式に招待されます。それは初めて結婚式に招待された時のことでした。何も分からず招待されるまま会場へ行った私は、日本の結婚式をイメージしたため二時間程度で終わるだろうと甘く見ていました。ところがまず会場で三〇分ほど待たされた後、公民館のような所へ新郎新婦をはじめ参列者の人達が行列を組んで移動し、そこで一つのセレモニー。その後教会へ移動し俗に言う挙式があって、披露宴会場へ移動しての宴となりました。披露宴開始からニ時間程度と思っていた私は、行列、セレモニー、行列、教会での挙式、行列とその時点で既に心身共に疲れ果てていました。途中で帰ることは大変失礼にあたると聞いていた私はこの披露宴が終われば開放されると思って耐えていました。ところが二時間過ぎ、三時間過ぎても一向に終わる気配がなく、挙句の果てに新婦の友達から目いっぱいワインを飲まされたり、新婦とダンスして目を回されたりして時間の感覚と記憶を失ってしまいました。

気が付いた時は車の中で寝ており、夜の一二時近くを回っておりました（※これが真の彼の姿、生活パターンです…本人以外全員納得）。

会場へ最初に到着してから実に一〇時間以上経過していた事になります。後で聞いた話ではあれが朝まで続いたそうで、新郎新婦や出席者のパワーにはびっくりしました。全く何も知らず出席した私にとってはとんだ“疲労宴”でした。

まいったな！ハンガリーには

高根　友光

ＢＵＤＡＰＥＳＴから、南にバスで一時間。降り立った町は温かい春の陽気の中で閑散としていた。バス停前の小さいコーヒーショップだけが店を開けていた。

**<ＫＥＲＥＭ　ＥＧＹ　ＫＡＶＥＴ">
**

思わず「プリーズ」を付けたのだが・・・・、

店員には通じなかった様である。けげんな様子でこちらを見ている。

棒読みしたガイドブックを見せるとコーヒーを造り始めた彼女が大変な美人であることにようやく気が付く、何故か心休まる気分になった。

立ち飲みのコーヒーショップであったが、コーヒーを運んでくれた美人の彼女は、・・・・・私より一〇㎝は背が高かった・・・・・・。

この店で両替が出来る事。そして日本円も取り扱ってくれる事を何とかお願いし、　アフターファイブの気分で町の散策に向かう。

通りにはアパートの一階を改造した小さな店が並んでいた。　鉄のシャッターの向こうは、良く見なければ商店とは気が付かない暗さの中に少ない商品が並んでいた。

これが工場を建設する為に訪れた。三年前の **Dunaujvaros** 市への最初の一歩でした。

民家を借りて仮事務所・工場建設・日本からの機械の受入設置・従業員の採用・許認可ライセンスの取得・量産体制の構築　慌しい一年があっという間に過ぎた。ＨＵＮＧＡＲＹ と本当に向き合ったのは、ＨＵＮＧＡＲＹ の従業員と一緒に仕事を始めた時からだった。当初、日本人の物差しで判断しておりましたので、戸惑いの毎日でした。

入社面接の時の売り込みと実際の仕事ぶりは、なぜこんなに違うのか。**謙虚**という文化があるの？？？　このＨＵＮＧＡＲＹには！！！！

出退勤時、会社の門前で抱き合ってキスをしている。休み時間もやっている！！

・・・・礼節・・・・・・・・・。挨拶代わりのチュッは許容範囲と私も思うが・・・・・・　。

誰だ！！！　頭が良くて、親日的で優秀な民族である。なんて本に書いた奴は・・・終業時間近くになると**もう仕事は終わりだもんね。**　なんてさっさと帰ってしまう。おいおい、チンタラ・チンタラ仕事をしているからやりきれないのだ。この後は誰がやるんだ。**責任を負わされている日本人**がぶつぶつ言いながら、その仕事を引き継いで夜中までやる毎日でした。

まいったな！！　ＨＵＮＧＡＲＹ には・・・・・・。

こんなぼやきで、又一年がアット言う間に過ぎて行った。私たちも日本人です。この二年間にきっちり学習致しました。

社員は若者から少し年取った社員に変えていきました。責任転嫁と口で仕事をするだけのローカル・リーダーは大胆に（**cserel**）してしまいました（具体的には格下げ・解雇）。

日本人が先頭になり、私たちの部品作りのやり方を妥協することなく、職場に作り上げる事に方針を変えました。その結果、会社を辞める社員が多くなりました。またプレスの職場ではサボタージュさえ発生する始末です。私たちのやり方に合わないＨＵＮＧＡＲＹ 幹部も職場を去っていきました。

「俺たちはこのやり方で今日を作ってきたんだ。これが日本の物作りだ！！！」

何て、自らを慰めながら綱渡り生産の連続でした。お客様が日系企業でしたので、激励・援助の中で何とか持ちこたえたと振り返っております。

今日、この事が正解だったと思います。私たちを理解してくれるＨＵＮＧＡＲＹ 社員が各職場に出てきてくれました。　出勤率が上がり・離職率は低下してきました。

「日本人があれだけやっている、俺たちもやろう！！！」　何ていう涙が出るような社員も現れました。感激致しました。彼はすぐリーダーに昇格・昇給した事はトウゼンの事です。テキトウな社員は去り、良い社員(ＨＵＮＧＡＲＹ 人)が多くなったと感じております。今、何となく手応えを感じ始めました。

しかし 部品製造業としては、中国・東南アジアの各企業との市場競争があります。日本人とＨＵＮＧＡＲＹ 人が一緒になって作り上げる部品が市場競争に負けてしまったら、何にも残りません。勝負はこれからです（我社のＨＵＮＧＡＲＹ社員は判ってくれるかな・・・・このスピリットを？）。

今までの経験の中で、裸でぶっつかって行けば必ず応えてくれるＨＵＮＧＡＲＹ 人が居る。そんな確信を持つ事が出来ました。一方、文化・習慣の違い、そして日本にもある世代落差などいろいろある事も実感しています。

「その前に、日本人と裸の付き合いをやろうや！！。なあ　マジャール人！！」。

そんな気持ちをベースに、もう一度このＨＵＮＧＡＲＹを見つめて行こうと思っています。

そして、気が付けばもう四年目。そろそろマジャール語も本格的に勉強しなくては・・・・・・と又、思う昨今であります。

冬から夏へ

太田　智子

フランクフルトに向かう飛行機の中で、娘はずっと泣いていた。「気分が悪いの？」と聞くと、「日本がどんどん離れて淋しいの」と言う。「お父さんが待っているよ」と、背中を撫でてやることしか出来なかった。

初めての転勤が海外赴任。二人の子供達はこの日をどんな思いで迎えただろう。引越しの準備に追われ、これからの事をゆっくり考える余裕もなかった私だが、表情は不安でいっぱいだったのだろうか？　海外赴任の経験もあり、何度も転勤を繰り返している友人が、「何処に行っても、必ず待ってくれている人がいるわよ、大丈夫」と言ってくれた。この言葉が何よりも支えになり、それを信じて明るく日本を発ったはずだった。でも、娘と一緒に泣きそうになった。

私達がここに来たのは、十一月の初めだった。子供達は、自宅から歩いて五分程のアメリカンスクールに通い始めた。息子はすぐに慣れたが（そう見えただけかもしれない）、娘は毎日泣き叫んだ。「どうして、私はこんな学校に行かなくちゃいけないの！」と。スコットランド人のクラス担任は、黙って娘を抱き寄せ、振り切って帰る私に代わっていつまでも頬擦りしてくれた。

一番困ったのは子供達の宿題だった。問題の意味すら分らない。また、娘の担任が渡してくれる一週間の予定表には、学校での様子や宿題についての短いコメントが書き添えてあった。私も返事が「Thank you !」だけではいけないと思い、あれこれ質問したり話題も見つけた。睡魔に襲われ眠ってしまった時は、朝、登校時間ギリギリまで書いていた。学年の終わりに改めて見たら、本当に毎日よく書く事があったもんだと、我ながら感心した。その全てに丁寧な返事をくれた担任の先生に、心から感謝した。

次第に生活のペースは掴めたものの、どんよりとした日中の暗さには耐えられなかった。当時は十二区の見晴らしの良い所に住んでいたが、霧で何も見えやしない。おまけに、豆腐売りのラッパを物悲しくしたような音楽が流れる。「近くに時計台でもあるのか？　それにしても暗いメロディ。」と、耳をふさいだ事もあった。それが「アイスクリーム売り」のトラックからの音楽と知ったのは、二年近く経ってからだった。

春から夏にここに来た人達と、冬に来た人達（ハンガリーには秋はないと、私は思う）では、この地の印象は随分違うだろう。なかなか馴染めないでいた私は、「冬に来た者は不幸ね」とある方に話したら、彼女は「ある日、突然、春が来るのよ。

花も一気に咲いて別世界。楽しみに待っていて！」と、私をワクワクさせる様に言った。その日から、私は気持ちを切り換えることが出来た。別世界に向かって、ここの生活を楽しんでみよう。

初めて迎える春は、本当にまぶしいくらいだった。木々が一斉に芽吹き、一気に新緑の世界となった。太陽も輝き、皆、所狭しと花を植える。ベランダで読書をする左隣のご主人。右隣の奥さんはミシン掛け（ベランダで）。冬眠から覚めた生き物みたいに近所の人が活動し始め、煙突から煙が立たなくなった。一人で出歩くことも、平気になっていた。

夏になって、イタリアへ家族旅行に行った。自分達で切符を買って、列車に乗り、小さな町も訪ねた。ハンガリーとも違った魅力的な土地で、家族が同じ時をゆったり過ごせた充実した一時だった。ハンガリーにいるからこそ、家族揃ってヨーロッパの他の国も訪れることが出来たのだ。子供達が、イタリア人を「ガイジン」と物怖じせず、気楽に話しかける姿を見て、頼もしく思えた。ハンガリーでの経験が、いつの間にか彼等を成長させているのを感じた。

ハンガリー人達とは、未だに思うようにコミュニケーションが取れないけれど、私が慌てたり困ったりして「**Bocsanat!**」と言うと、彼等は「**Lassan**」とか「**Semmi**」と優しく言ってくれる（私にはそう聞こえているが、正しいかは不明）。ハンガリーではムッとさせられる事も多いけれど、私はこのような優しい言葉に、何度も気持ちを楽にさせてもらった。

今年の夏は、もう三回目。私はすっかりハンガリーの生活を楽しんでいる。日本にいた頃よりも自分の時間が取れるし、ワインやビールも満喫している。日常生活にも、あまり不自由を感じなくなった。幸い、家族の皆が病気もケガもしないで過ごしていることが、一番の幸せだ。

そして、ここには私を待っていてくれた人（心の支えになってくれた人）が、やっぱり沢山いた。その人達に助けられたお陰で、今の生活があると思う。皆さん、どうもありがとう。**Nagyon szepen koszonom!**

後、どの位ハンガリーで過ごすかわからないけれど、もっともっと素晴らしい面を発見しながら、ハンガリーを楽しみたい。

結婚式&子育て事情

山口　晃

一九九八年春にハンガリーに赴任し、エステルゴムに住んで四年あまり。その間に当地で結婚式を挙げ、それから子育てという貴重な人生の二大行事を経験することができたのでそのお話を。

私に遅れること約一年、妻(ちなみに日本人です)が同じ会社にハンガリー語の通訳として日本から単身やってきた。お互い独身であった二人が意気投合し、やがて一九九九年末には婚約へと相成ったのである。結婚式も気候の良い二〇〇〇年五月頃がいいだろうと話はトントン拍子に進んだ。　結婚を決意したのはいいが、当地には日本の結婚式場・ホテルのように結婚パックシステムというべきものが存在しなかったのだ。そこでまずは式場確保とばかり教会の予約をすることにした。一生に一度の結婚式なので、どうせなら地元のエステルゴム大聖堂で挙げようと大聖堂の予約に出向いた。拍子抜けするくらい意外にすんなりと予約が取れた。五月は結婚シーズンで、結婚式の多い土曜日には一時間に一組の予約が入っているとのこと。

次にその他の結婚式の準備を進めていくことになるのだが、そこは妻の語学力の強みで、会社のハンガリー人同僚から情報を仕入れたり、ハンガリーの結婚雑誌の広告からたどったりした。貸衣装、案内状の印刷、披露宴のレストラン予約、ハイヤー、記念写真、花束、引き出物などなどすべての手配を自分たちで行う必要が有った。しかもそれぞれ異なる業者に！！　これぞハンガリー流であり、その分費用を節約できたのだが、このときばかりは日本のパックシステムがうらやましく思えた。ハンガリーでは結婚式当日にはじめてウエディングドレス姿を夫に見せるらしく、私が一緒に貸衣装屋さんについていったときは、不思議な目で見られたものである。

結婚式には日本から両家親族が来洪していたため、結婚式ツアー兼観光ということで、結婚式前夜は親族だけの披露宴をドナウ川クルーズというかたちで行った。王宮の丘、くさり橋など、みなただただ美しさでため息と感嘆の声を上げていた。

そうして結婚式当日ホテルを出発し、着付けをエステルゴムで終え写真撮影のため、スタジオへ向かった。スタジオでは女性カメラマンから、「腰に手を回し、見つめ合ってください」など、日本人にはとうてい恥ずかしいような注文があり、照れながらもスタジオ撮影終了となった。その後大聖堂に移動し屋外で同じようにポーズを取りながらの撮影となった。後日写真を見るとさすがプロカメラマンだけあって、見事なヨー

ロッパ調？の写真に仕上がっていた。

神父さんと大まかな挙式の流れについて打ち合わせたほかには、挙式の段取り説明もほとんどなく、挙式三〇分くらい前に係員が先導してくれるので一緒に入場するよう教えてくれた。当然リハーサルなどというものもなく、ぶっつけ本番で挙式に臨んだのであった。そのせいか、花婿・花嫁の立ち位置が逆であったが祭壇前で神父さんとコソコソ話しをした後、「まあいいか、このまま行きましょう」というハプニングもあった。

荘厳なパイプオルガンの調べを聴きながら入場し、その後賛美歌斉唱、誓いの言葉、指輪の交換とおなじみの儀式が滞り無く進められた。日本と異なることといえば、ハンガリーの結婚式では必ず朗読することになっている詩を妻が読み上げたり、日本人参列者のために神父さんが英語でも進行してくれたことである。それらバジリカでの出来事一つ一つが私たち二人にとって、とても感動的な出来事であり、一生忘れることのできない良い思い出となったのである。

時は流れ、二〇〇一年ニ月に息子の誕生となった。日本での里帰り出産であったが、ぴったり予定日に生まれてくれたため、私の一時帰国も間に合い、出産に立ち会うことが出来た。早くも生後ニカ月半にはハンガリーに呼び寄せ、そこから夫婦二人の子育て生活が始まったのである。

異国での初めての子育てに当初不安を感じていたが、じきのそんな不安もすぐに解消された。というか、不安を感じている暇も無かったという方が正確であろうか。考えてみれば赤ん坊は最初のうちはオッパイが飲め、眠ることさえできれば良いわけで、大人が感じている言葉や食べ物、生活習慣についてのストレスは、まったく皆無であったと思われる。幸い近所にもハンガリー人の子供も多く、妻は同じ悩みを持つお母さん方の中、育児ブルーになることもまぬがれた。

ありがたいことにハンガリーの人々は赤ちゃんに対してとてもやさしく、そして寛容に接してくれるということも、子育てにおいて非常に助かっている。レストランで食事をしても、店員さんが息子をあやしてくれたりするのである。隣に座ったお客さんも嫌な顔せず、気軽に息子に声をかけてくれる。息子が騒いで気まずい思いをしている我々にとっては、こんな些細なことでも大変気が楽になるのである。

ハンガリー人にとって日本人の赤ん坊は珍しいらしく、スーパーマーケットに買い物に行けば、通りがかりの人が、時には連れの人にまで「ちょっと見てよ」という感じで、立ち止まってまじまじながめ、「**aranyos**(アラニョシュ、かわい

い)」、「e'des(エーデッシュ、英語で言うとsweet)」、「sze'p(セープ、美しい)」などと賛辞をいただき、このときばかりはこちらも誇らしいやら気恥ずかしいやら。月齢をきかれて答えると、大きいとびっくりされることがしばしばあった。きけば赤ん坊の成長カーブが日本人とは違うらしい。日本では誕生時の体重にくらべて、三カ月で倍になるといわれているが、当地では六カ月で倍になるらしい。おかげでハンガリー人の知人には「ダイエットしなきゃね」と真顔で言われたほどである。

　これまでに様々な方からアドバイスをいただき、助けていただいたことに大変深く感謝している。いまでは一六カ月になる息子も毎日のように公園に行き、近所のハンガリー人の子供たちと一緒に遊んでいる。ハンガリー語で言われたことも大体理解しているらしいが、残念なことに息子は日本に帰国すればハンガリー語も忘れてしまうだろうし、楽しかったハンガリーの思い出もほとんど記憶してないだろう。しかし、我々夫婦にとっては得難い貴重な経験ができたことを、これからもずっと心の糧にしてゆきたい。

初めての海外勤務

大石　守

　ハンガリー在住一年半、なんかバタバタしていたら過ぎてしまったというのが実感でして、こちらの状況も少し分かるようになりましたが、余暇の過ごし方はGOLFにショッピングと、相変わらず「貧しライフ」の今日この頃です。

　私の海外赴任は今回始めてでして、語学力もなく昨年は本当に大変だったと実感しています。最初に訪れた危機は忘れもしない赴任直後…某社のBudapest Office、業者は新任の責任者が来るという事でお偉方が雁首を揃え、てぐすねを引いて待ち構えていました。

　その修羅場にいたいけな日本人（背が低いだけか？）が「Good morning…」などとブツブツ言いながら入っていたものですから、すか

さずものすっごい握手の嵐と英語の質問の機関銃、……一人寂しく無言でたたずむ私がいました。

それを見た業者はさー大変、どうしたらいいのか顔を見合わせあたふた状態に陥った事は言うまでもありません、しかし、敵もさるもので、次に訪れた時は怪しい日本語を操る変なHungary人通訳おばさんが同席していました。

そして、このおばさんが間に入った事で私のビジネスはなおさら話しがややこしくなって行った事は言うまでもありません。

尚、勿論現在はこの変なおばさんは同席していませんし、ドタバタの甲斐があってか、この業者とのビジネスもスムーズに進んでいますので、ご安心あれ社長！

また、私の部下は皆Hungary人です。前任者から「**Hungary人は真面目で優秀**」と聞かされていた為、当初は方針と指示を出せば日本と同じようにその立場で効果的な対応とアウトプットを出してくれると信じマネージメントしていました。

しかし、一年間Hungary人の仕事のやりざまを見ていると前任者の言う事は間違ってはいませんが、大事な事が漏れている事に気が付きました。それは何事にも「**いいかげん**」だったのです。常に進捗確認していないと私の指示は、何時の間にかドナウ川に流されて何処かに行ってしまうのです。

これは赴任当初の出来事ですが、総務の日本人お世話係（車とアパート関係）の○○ーちゃん、ボーイッシュでチャーミングです。車のワイパーゴム交換依頼してから完了まで三ヶ月掛かりました。またアパートにＪＳＴＶアンテナを設置する為の大家との折衝、こちらは半年かかりました。勿論毎週のように督促しましたが、返事はいつも「ＯＫ!」っと、とってもいいのです。きっとスイスに住んでいる大家の家まで歩いて折衝に行ってくれたのでしょう。

一番苦戦したのがアパートの**セキュリティシステム**。○○ーちゃんがレモンドコードを教えてくれた為、安心して使ってましたが、ある日お掃除おばさんが窓を開けっ放しで帰った為、それを知らずにセットしてしまいアラームが……。ここで私は落ち着いて警備会社にレモンドコードを連絡、しかし回答は「**ネムネム！**」。…そのうち警官が駆けつけさー大変！この時は５千フォリントでお引き取りを願いました。もちろん○○ーちゃんに事情を話すと何事もなかったように新しいレモンドコードくれました。

これで安心かと思いきや、これも「**…ネムネム！**」。**…また・だ・った・の・・ね！**。なんと三回もポリスにお駄賃をあげる羽目になってしまったのでした。総額一万八千フォリント。おかげで十二区のポリスは事有

れば皆さん競って、我先にと我が家に飛んできてくれるようになりました。…勿論小遣い稼ぎに……。かくして大石邸は十二区中で、最も安全な館へと変貌を遂げて行ったのでした。

続ですが、現在も最新のレモンドコードを貰ってシステムを使っていますが、このコードが正しいか否かテストする勇気は私にはありません。今だに毎日システムを使う度に極度の緊張感を覚えます。でも、今日も明るく健康的な○○ーちゃんが「**Good morning Ooishi san!**」て声を掛けてくれるし、私は出掛けの極度の緊張感が通勤中に丁度いい緊張感に変わって、それを持続したまま毎日ビジネスに入れると言う最適なビジネススタイルをここHungaryで得る事が出来たのでした……ってか？

一方余暇の過ごし方ですが、旅行好きな私にとってHungaryの地の利は本当に最高でして、この一年半で二一ヶ国を観光する事が出来、日本にいる時に東南アジアとアメリカを一人で回った一二ヶ国と合わせると実に三三ヶ国制覇した事になります。

Europeにきて車で一八ヶ国、飛行機で三ヶ国回りました。しかし、皆さんに比べて決して休暇が多いわけではありません。ただじっとしているのが嫌いな性分でしで、少しでも暇が出来るとあっちこっち見にとんでいってしまった結果です。まだ一日も有給休暇取得していません（社長曰く「**そんなもんない！**」…そうですが）。

日本で想像していたＥｕｒｏｐｅ、想像どうり美しくで感激しながら回りました。昨年五月連休に仲間と車でドイツとスイスを回った時は七日間でなんとデジカメに四三六枚の美しい記録を収める事ができました、勿論**メモリーステックで使い勝手がいいソニーのサイバーショットで撮ってVAIOで再生した**事は言うまでもありませんが…。しかしながらさすがに四〇〇枚以上の写真を後で見る暇がありません。何事も適度って言うものが有る事を思い知らされた旅でした。

Europeの道は何処も似たような町角で分かりづらく、赴任当初同僚に時折ウィーンに連れて行ってもらいました。食べ放題寿司ランチを食べにです。車でリングに突入するのは素人には大変難しく、教えてもらった「**教会が見えたら左**」。これを忠実に守らないと後が大変です。おかげでこの言葉が脳裏に焼き付き何処の国に行っても「**教会が見えたら左**」。これ結構通用してパンノニァの**Golf**場への道もこれで覚えました。先人達はさすが偉大だと思っていましたが、最近何処に行っても教会が掃いて捨てるほどあるのにハタッと気が付きました……。

また、早く**Budapest**の道を覚えようと毎週末町中を走りまわりましたが、ゲレルトの丘にはまいりました。最初のトライからなんと三週間後にしてやっとたどりつく事ができました。思い込みというのは恐ろしいもので、何回行っても「うさぎや」の前に出てしまうのです。おかしいな～と思い冷静に分析した結果三週間めにして…そうです。一つ丘ずれしているのに気が付いたのでした。同僚諸氏は冷たいもので相談しても毎週大笑いしているだけでした。

そんな私も半年も過ぎると要領が掴めるようになり、昨年の夏期連休は一三日間バルト三国を車で駆け巡りました。五千キロの旅です。日本にいたら思いも着かない旅です。ポーランドのクラクフ・アウシュビッツを皮切りにワルシャワ経由でエストニア～ラトビア～リトアニア（名前が紛らしこいので何処が何処だか順番忘れましたが…）とバルト三国を走りまわり、帰りはポーランドのグダンスクを回ってプラハ経由で帰ってきました。いや～～圧巻でした！

ポーランドからバルト三国への出入国、聞きしに勝る国境で、たいして混んでもいないのに三時間以上待たされました。よくよく観察していたらなんときっちり四五分で一〇台通すだけです。しかも他のどこの国境よりも傲慢な態度です。ばっかやろーです。ボスニアヘルツゴビナの国境の方がまだ愛想がよかったです。

国境で待っていると入国してきた大型トレーラーに六人の警察が取り囲み運転手を引きずりおろしての大騒ぎ事件がありました。なんと、運転手は泥酔で歩けない状態でした。こんなに待たせれば酒も飲みたくなる運転手の気持ちを少しでも知れー、エストニア！

（リトアニァだったかな？？？まっいいか！）

帰任にはまだ多少期間が残っていますので、せっかくの海外生活これからも悔いの残らないよう、仕事にプライベートにと**安全を第一**にいろいろ経験しておきたいと思っています。こんなもんで私の「ハンガリーの生活」の一端のご紹介を終わりますが、何方か参考になりましたですかね？……やっぱりだめ？

今の私の夢は、なんとか帰任までに**Hungary**で一旗あげて、英雄広場の真ん中に私の銅像の一つや二つ置いて帰る事です。この夢を語ると同僚達は**「広場の名前が変わってしまうので止めてくれ！」**などと言います。夢のないやつらです。困ったもんだ！

そんな訳で、遠い異国の地にきていろいろな経験を重ねさせてもらいました。こうやって人はだんだん大人になっていくんだな～っと実感している今日この頃です。

ブタペストに暮らしてみれば

賀澤　啓子

ハンガリーに来て、二度目の春を迎えている。アーモンドやマロニエ、リラの花咲く春、ゆるやかな春を感じながらハンガリーの魅力にますます惹かれている私である。

来たばかりの頃は失敗の連続

スーパーに行っても、どれが砂糖だか、小麦粉だかわからない。読めない袋を見つめながら「たぶんこれかな？」と買ってみて、中味が当たっていた時はくじ引きに当たったかのように嬉しかった。見た目だけで鶏のもも肉だと信じて買っていた肉も、「ハンガリーの鶏って大きいんですね。人も大きいから、鶏も大きいんですね」と他の奥さんに話すと、「あなた七面鳥を食べているんじゃないの？」と言われ、嫌な予感。あわてて確認すると、本当にその肉は七面鳥だった。

ハンガリーの水は石灰分が多く、洗濯機に蓄積した石灰を溶かす洗剤もあるという話を聞き自宅の洗剤を見ると、なんとそのものだった。そう、私は洗剤だと信じて、衣類をカルゴンで洗っていたのだった。娘が好きなピーマンの肉詰めにしようと思い、日本と同じように緑色のパプリカを買ってきて作ったら、辛くって辛くって涙を流しながら食べた。

漂白剤を探し求め、スーパーでお店の人がいないスキを見て、それらしきボトルのふたを開けて次々に匂いをかんで確認し、「これだ！」と確信した時の喜び。使った油を入れておくオイルポットが見つからず、何日もお店を探して、ようやくオリーブオイルポットをみつけた時の嬉しさ。なんでもどこでも手に入る日本では味わえないような達成感があった。

私の手違いで船便の荷物の方にトランスを入れてしまい、炊飯器は届いているのに使えないという日がニヶ月続いた。キャンプを思い出しながらおなべでご飯を炊いてみると、芯が残って焦げていたのに、久々の白米に夫がとっても喜んでくれた。

カイザーの野菜売り場でも、値段をつけるのに絵だけで判断してレジに並ぶと、どうも名前が間違っていたらしい。正しい名前を教えてもらって、あわてて野菜売り場にダッシュした。その後、野菜には番号が付いている事がわかるまでは何ヶ月もかかった。それまで何度もこんなそそっかしい外国人を辛抱強く待っていてくれたレジのおばさんや列の後の人達には感謝している。

市場で買い物

「市場でホウレンソウが売っていたよ。」と聞けば買いに行ったり、白菜が売り出したいえば喜んだり、毎日の買い物にも季節を感じることができたし、普段買えない材料が手に入った時の喜びはなんともいえないものだった。市場での買い物は言葉の面で苦労したが、簡単なハンガリー語ノートを持ち歩き、あとは身振り手振りと度胸で必死に乗り切ってきた。外国人だからか言葉が通じないからか、冷たい態度をとられたり、値段を誤魔化されたりしても何も言えずに落ちこんだこともある。だが、だからこそ優しく笑顔で応対してもらえるととっても嬉しく、それだけでその日は幸せ気分になってしまうほど単純な私であった。

便利な交通

ブタペストは路線バスやトラム・地下鉄が思った以上に発達していて、乗り換えて出かけられるのがとっても便利なところだ。身長一五七㎝の私は日本ではさほど小さいと思ったことはなかったのに、ハンガリーでは不便と感じる身長らしい。路線バスに乗っても椅子に深く座ると踵まで床につかない。踵が上がったままの体勢は辛いので、よりかからずにちょっと手前に腰かけるようにしている。腹筋を鍛えるのにちょうどいいかと思いながらも、同じような身長の婦人をみつけると座り方を研究してしまう。地下鉄に乗っても手すりが高くてつかまるのがやっとで、五分も腕をあげていると、プルプルしてきて、いい運動の場と化すのである。

そんな鍛えられる？車内だが、バスに乗って出かけると、いろんなハンガリーが見えてくる。小さい子ども連れや年配の人に席を譲る若者。ベビーカーの赤ちゃんを乗せようとしていると手伝ってくれる男性。杖をついて降りようとする老人にそっと手を差し出す女性。クリスマス前の郵便局の長―い列でうんざりしていると、赤ちゃんづれのお母さんに順番を譲る婦人の姿。そんな心温まる場面は、私の心に響いてくる。心が安らぎ、忘れていた何かを思い出したような気にさせてくれる。

少ない母親の怒鳴り声、子供の泣き声

ハンガリーでは日本のようにスーパーで泣いて物を欲しがる小さい子どもや、それを怒る母親の声、バスや電車の中で騒ぐ子どもが少ないように思う。

小さい子どももどこか落ちつきがあって、心が安定しているように感じられるのは私だけであろうか。社会の優しさの中で、地域の人に守られながら育まれてきた子ども達だからこそ、優しく逞しく育っているのだなーという気がしてならない・・・。

交差点で信号を守らない若いドライバーを、大声で叱っている老人を見かけたことがあった。年配者が若者に社会のルールを教えていくという、ごくあたりまえの事が受け継がれている国でもある。

先月、ハンガリーの保育園を見学に行くという機会に恵まれた。話に聞いていたコダーイの保育は、本当に素晴らしいものであった。保育者の表情や語りかけ、子ども達の自然な流れと情緒の安定は理想とするものであった。ハンガリーは保育者になる学校に入るにも適性試験があるという。自分の仕事に誇りを持っている保育士さんの無駄のない動きや、子ども一人一人を大切にした温かい接し方に学んだことが多かった。

乳幼児期という成長期の中でも人との触れ合いや、安らぎや愛情を一番必要とする大切な時期に、あんなに心温まる保育園で家庭的に過ごすことができる子ども達はとっても幸せであると思った。

貴重な経験と素晴らしい出会いがあったハンガリーでの暮らし。今後ハンガリーはどんな姿を私にみせてくれるのだろうか。そして、私はどんな事を思い、悩み、感じていくのだろうか。秘なる魅力をもつこの大地に全てお任せしたいと思っている。

子連れハンガリー滞在記

野村　敬子

ハンガリーに来て2年が過ぎた。２０００年４月初めの、桜が満開の日に日本を発った。前年夏に庭に植えたばかりの雪柳も満開だったし、いちばん美しい季節に日本を去ることが心残りだった。ハンガリーもこの時期から花が咲き始め、新緑が萌え、花ざかりになるということに気付きもせず。

５歳と1歳の男の子を連れ、ロンドン経由でブダペストの空港に着いたのは午後１０時。ダンボール箱１個とベビーカーが出てこなっかたとき、口もきけないほど疲れていた。なにしろ関西空港からロンドンまで、１歳の子のお供で何度も何度も機内をぐるぐる回らされたし、退屈して泣きわめくのをなだめたり、他の乗客に恐縮したり、と気の休まるひまもない。５歳の子はコンピューターゲームばかりやっていた。私は機内に持ち込んだ絵本や折り紙セットを子供のために開く余裕もなかった。小さな子を連れ、夫の赴任地へ飛行機で長旅をする人は多いと思うが、みな同じ苦労をしているのだろう。

最初のブダペストの印象は、空港から2区の家への道すがら、車の窓から見るペスト側の建物の強烈な落書きと、ブダの住宅街で闇の中に白く浮かんでいた桜の花。日本の桜に未練を残していた私には、その細々と咲いている桜がとてもうれしかった。そして、その桜は私が高校生だったときの日を思い出させた。父の転勤が急に決まり、春休みに横浜から吹田に引っ越さなければならなくなったときのことだ。友達はみな泣き、終了式のあとクラスの男の子の家で急きょお別れ会を開いてもらった。夜になって帰るとき、その家のお母様がみんなを門の前まで見送りに出て、まあ、朧月がきれいねえ、と言った。私達はそんなきれいな春の夜が悲しくて、ただだまって空を見上げたのだった。そのとき月と一緒に見えた三部咲きの桜の花は２０年以上も私の頭の中に焼きついている。引越しと住宅街の夜桜という共通項で思い出したのだろうが、それにしてもずいぶん遠いところにきたものだと、疲れた頭でぼんやりと考えていた。距離的にも時間的にも。

ハンガリーに来て、最初は自分の車を持っていなかった。人や物事を観察するのが好きなこともあって、もともと電車やバスに乗るのが好きなのだが、結婚してからずっと公共の交通機関の不便なところに住み（日本でもアメリカでも）、毎日車を運転していた。それで、車を持たない生活というのをもう一度してみたかった。夫の仕事の性格上、赴任地はいつも広大な工場と安い人件費の

得られる地方都市に限られるので、首都に住むなんて思ってもみなかったねえ、と言っていたのだ。それで平日はどこへ行くにもベビーカーを押して行く。日本製の軽くて丈夫なやつである。すると車輪が小さいので、石畳の間にはさまってどうにも押しづらい。トラムの線路を横切るときはもっと大変で、一度は横断歩道をわたっている時、線路に車輪がはさまって抜けなくなりぎょっとしたが、あわてふためく間もなく、そばの男の人がすぐにひっぱりあげてくれ、おまけにそのまま私もろとも引っ張って、道を無事にわたらせてくれた。ベビーカーを押しているとハンガリー人は本当にやさしい。この親切のおかげで、日本製のコンパクトなベビーカーであちらこちら行けたのである。このベビーカーはアメリカで生まれた長男と一時帰国したとき、吹田で私の両親が買ってくれたものである。それも私が赤ん坊のとき、乳母車や三輪車を買ったという同じお店で。乗物だけを扱っている個人経営の古い店だった。アメリカでは羨望のまなざしを受けたベビーカーだが、ブダペストではハンガリー人が押している、大きな車輪の頑丈なベビーカーがうらやましい。あれだと石畳であろうとでこぼこ道であろうと、乗り越えていけそうだ。

バスに乗るときは、よく乗降口のすぐそばの席が空いていた。あつらえたようにいつも空いていて、乗ったらすぐにすわることができる。不思議だなあと思っていたのだが、あるときいつものように子供を連れてバスを待っていて、私は見た。やって来たバスの最前列にすわっていた若者が、子供連れの私の姿を見つけて、バスが止まる前にあわてて立ち上がって後ろに移動したのを。席がいつも空いていたのは、こういうわけだったのか。ありがたいなあ、いい国だなあと思った。

ハンガリーに来てすぐに上の子は6歳に、下の子は2歳になった。この年の夏は暑かった。1棟7軒、4階建ての1階の家にいると涼しいけれど、幼稚園が夏休みになってからは、ベビーカーとともにしょっちゅう3人であちこち出掛けた。方向音痴の私が道に迷うと、長男が助けてくれた。バス、トラム、電車を駆使していく。子供は乗り物が大好きだ。よく訪れたのはマルギット島である。巨木の木立の下を散歩し、遊び場で遊ばせ、花壇の花を見ながらおにぎりやサンドイッチを食べた。ここのプールには何回も行った。動物園は暑すぎた。レッゲールトのプールにも行ったし、センテンドレにも電車で行った。何もかもが珍しくて、この夏休みがいちばんハンガリーに入れ込んでいた時期である。

楽しい夏休みが終わり、長男がアメリカンスクールの小学1年生になった。私は車を買い、生活は一変し

た。何かの機会に親も学校に行くたび、日本ともハンガリーとも違う、アメリカやヨーロッパの国の母親と知り合うようになり、徐々に英語を話すことが多くなっていった。同じ年齢の男の子を持つ母親同士、文化や習慣は違っても、子供の幸せな毎日と将来を願っているのはどこの国の母親も同じである。そのために学校に対して自分の意見をはっきり言うし、教師よりよっぽどいばっている人もいる。そして母親も父親も、学校に深く関わろうとする態度に感銘を受けた。あんまり感心したので、翌年長男が2年生になったとき、友人に連れられてＰＳＡ（ＰＴＡ）に入ってみた。やりたい人、またはできる人が、できるときに、できることをするというシステムで、決して強制されたり無理をしなくてよい。そうやって感心したり驚いたりしながら、ふうらりぶうらりと学校に関わっているうちにまた1年が過ぎ、先日長男の小学2年生も無事終了した。3年生からは新キャンパスに通う2年生は、最後の日に卒業式があり、担任の先生から一人ずつ名前を呼ばれて、低学年キャンパスの校長先生から卒業証書と、それから遊び場の砂を記念にもらった。

次男は気難しく、我ままいっぱいの4歳だ。ブダペストのあらゆるインターナショナル幼稚園に電話をしたり見学に行ったり、他のお母さんたちに評判を聞いたり、手を尽くした末、入れたのが、知る人ぞ知るちょっと変わった保育園。丈高い木に囲まれて、外見は完全に普通の古くて大きな一軒家であり、看板も広告もない。園長先生はその昔、外国人の子供のナニーをやっていたのだが、評判が評判を呼び子供の数が増えて、学校をつくってしまった。それでもファミリーのような暖かい雰囲気を大事にしているので、子供の人数を一定以上は増やさないという。先生たちはみな若いハンガリー人だが、まさにナニーのように子供の面倒をよく見て、一緒に遊んでくれる。この保育園を教えてくれたフィンランド人とアメリカ人の母親には本当に感謝している。

日本にいる友人とはよくｅメールで子育て談義、教育談義をたたかわしている（高校のとき、ともに朧月を振り仰いだあの友人のひとりである！）。世界中どこにいても子供に関する悩みは尽きないであろうが、インターナショナルスクールでさまざまな国のさまざまな考えを持った人と知り合いになり、子育てについて（もちろんほかのことも）意見を交換するのは本当に楽しい。そして気の合う人同士のことを、英語では「ケミカルがある」と言うのだそうだが（デンマーク語でも「ケミがある」というらしい）、国籍を越えてそういった人を友人に持ち、心を開いて語り合うのは外国生活の醍醐味である。

ハンガリーで病院にかかる術

森下　恒治

ハンガリーでコネなしで行きたくない場所ベストスリーを上げるなら、まずは病院、次に滞在ビザや移住許可書を発行する入国管理事務所、その次に来るのが警察と税関という順になる。以前はもっとリストを続けられたが、さすがに体制転換で銀行、電話会社や公共料金集金会社のサービスが改善されたので、残っているのは皆、国営か、政府の事務所ということになる。何が問題か。これは経験した者でなければ到底、分からない。その行きたくないトップの病院に、五泊も世話になった。入院と分かった時には腹を据えた。お陰で得がたい社会勉強させてもらった。今後、入院する場合に備えた事前のレッスンとして、その心得を伝授しておきたい。

受付がない！！

ハンガリー人の組織性のなさを非難すると、イタリアはもっとひどいといわれるが、全体に共通する問題の根源は「受け付けがない」ことに尽きる。そんな馬鹿なと思われるだろうが、まず公営病院（ふつう住民が通う地区の診療所を含め）には患者を受け付ける窓口がない。近所の診療所へは定期的に尿酸抑制剤と血圧降下剤の処方をもらいに行くが、担当の先生のドアの前で順番が来るのを待つだけ。順番を決めるのはドアの前に集まった患者たち。到着順に、自分が誰の次かを確かめることで、順番が決まる仕組みになっている。前の患者が出たら、次の患者が入る。中には看護婦がいて、患者の名前をコンピュータから読み出し、処方箋をプリントアウトし、医者がサインする。ほとんどの診療所はこのような仕組みで動いている。

小さな診療所はこれでも良いのだが、大きな病院に行くとこれがたいへんになる。ドアの前に二〇人も三〇人も並んでいるが、整列しているわけではないから、自分は誰の次かが分からなくなり、患者同士でもめることがある。信じられない光景が日常茶飯に見られる。ドアをノックして確かめようとしようものなら、看護婦が「ドアをたたかないで、外で待っていなさい」と命令する。これは警察でも入国管理事務所でもまったく同じ。廊下に何人待っていようと、それを何とかしようという気持も考えもゼロ。あたかも自分たちが生殺与奪権をもっているかのように振舞っている。

こうして待っている間に、コネのある人は順番とは無関係に診療室に入って行くが、これに抗議しても仕方がない。通常、ドアには「診療は到着順ではない」という但し書きが貼ってある。

入国管理事務所へ行きたくないのも、まったく同じ理由だ。受け付ける、順番を決めるという手順がなく、いったい何時になったら自分の番になるのか、三時間待つのか四時間待つのか分からない。ようやく自分の番になったと思ったら、窓口が違うという一言で済まされし、お昼になれば自動的に窓口が閉められる。何人並んでいようと関係ない。サービス精神などゼロである。

「受け付けの不存在」というのは、旧社会主義体制の役所組織の典型的な事例として、興味深い社会学的分析の対象になる。病院の場合には問題の根源ははっきりしている。病院組織をマネージする人がいない。つまり、「受け付けの不存在」は、「マネージメントの不存在」なのだ。病院に存在しているのは医者と看護婦、掃除人だけ。誰も組織管理のマネージメントに責任をもっていない。そこに問題があることも分からないほど、ハンガリーの病院経営は危機的である。

休日の救急と入院の予備知識

どうしても病院へ行かなければならない時には、救急で、できれば休日が良い。救急でも、看護婦に直談判してお金を掴ませないと、何時間待たされるか分からない。休日は患者が少なく、待たなくても当直医に診て貰える。治療費はいらないといわれても、それ相応のお金を手渡しするのが礼儀。当直医は若い医者で、給与は高が知れているから、チップが生活費の一部になっている。救急で看護婦がいない時には、担当の医者がカルテと必要な書類を全部作成する。書類作成を担当する事務員は存在しない。

平日に大病院へ行く必要ができた場合には、知り合いを通して、医者にコネをつけることが肝心だ。とにかく、コネがないと診療までどれだけ時間がかかるか分からないし、入院となった場合でも、コネがなければ大部屋に詰め込まれる。大きな病院には健康保険の請求や病院勤務員の給与計算、医薬品の購入を担当する経理は存在するが、患者を受け付ける事務局(事務員)は存在しない。医者、それも院長の権限は絶対である。

国営の大病院は総じて設備は良くない。しかし、病室は各種あり、一人ベッドの部屋もあれば、六―八人の大部屋もある。日本の病院のように差額ベッド代を払うわけでもないから、どの部屋に誰を入れるかは、院長(医科長)の権限になっている。コネの度合いによって、部屋が決まる。外国の損保会社の疾病保険をもっている場合には、そこから払うから一番良い部屋を欲しいと交渉することは可能だ。シャワーやトイレが付属している病室もあるから、どの病室に入れるかはどうでも良いことではない。さもなければ、とても清潔とはいえない共同トイレとシャワー室を使うはめになる。コネがなければお金で交渉するしかない。

看護婦は入れ替わり立ち代りで交代勤務になっている。入院が長くなると、看護婦や物理治療士などの役割分担が見えてくる。そうすると、いつも世話になる看護婦や優しくしてくれる治療士に、お金を手渡しする。大部屋に入れられたコネのない患者には、これが唯一の頼りの綱だ。誰か親身になって診て欲しいという気持がお金になる。年金生活者を含め、すべての入院患者は千フォリント札何枚かを常に用意しておき、自分が決めた人に渡す。身動きできない老人も、この時だけは全力を振り絞って、手渡しする。見ていて哀れになるが、これが現状。

ハンガリーの病院のトイレにはトイレットペーパーは備えてられていない(一般に学校も同じ)。一つは予算がない、二つは備えても誰かが持ち去ってしまうという理由からだ。配膳カートも鎖でラジエータの管につながれている。テレビも鎖でつながれている。さもなければ、誰かが持ち去ってしまうからだという。

朝食と夕食はパン一切れにバターかジャムが付き、コーヒーか紅茶を選ぶ。もちろん、お金がない病院のことだから、味に文句はつけられない。昼食だけは、温かいものが出る。食事サービスの状況は、ほぼ全国的に同じになっている。こういう状況だから、ほとんどの患者の家族は定時に食事を運んでくる。

この食事のサービスは、社会主義の時代から変っていない。昔、モスクワのシェレメチェヴォ空港で食事をしようと思ったら、従業員はいるのにレストランが開いていない。レストランというのは名ばかりで、食事の時刻になったら、テーブルにパン切れを配り、紅茶を注いでいくだけの仕事なのだ。漸く一九九〇年代になって、モスクワ空港に民間業者が入って、お金を出せば、いつでも食事することができるようになったが、公立病院の食事サービスというのは、昔のモスクワ空港の配膳と同じシステムで動いている。民間業者が入らない限り、改善はないという典型的な事例だ。

ハンガリーの健康保険料はグロスの給与の一一％である。所得税は全体平均で、ほぼ三〇―三五％と推定されるから、給与の四割近くは国庫予算に入っている勘定になる。可処分所得に二五％のＶＡＴがかかることを考えれば、ハンガリーは重税国家である。公共サービスの質に比して、この負担は非常に重い。明らかに、マネージメントの問題なのだ。

医療技術は低くない

ハンガリーの名誉のために言えば、設備は貧弱だが、医療技術は低くないし、医療システムは機能している。つまり、組織の経営はゼロだが、治療システムは機能している。そこが発展途上国と違うところだ。だから、手術を受けにウィーンに出かけるというのも賢い選択ではない。実際の治療は、設備の良し悪し以前に、医者の技術だ。

一九九〇年の一年間に日本とハンガリーのいろいろな病院で、膝の水を計六回抜くことになったが、一番うまく抜いてくれたのは、セーメルワイス大学の整形外科クリニックの膝の専門医である。もちろんコネで紹介してもらった。小さな注射器で、綺麗に抜いてくれた。その専門医が不在の時に、痛みに耐えかねて、ヤーノシュ病院の救急外科に行ったところ、二時間待たされたあげく、やぶ医者がご丁寧にも麻酔注射をして、やおら浣腸用のような太い注射器を持ち出し、水を抜こうとした。ところが綺麗に抜けないので、注射針を動かしている。この後、足全体を石膏で固めるという大げさなことまでやってくれた。家に戻り、石膏をぶっちぎった。東京の武蔵野日赤の救急医も、同じ程度のものだった。要するに、専門医でないと、同じ外科医でも役に立たない。

通風の発作でも、教科書しか読んでいなくて、通風患者を扱ったことのない内科医は、患者より知識がない。通風が親指の付け根に出るという教科書の文言しか勉強したことがない医者は、くるぶしや膝に出たり、肩の付け根（非常にまれだが）に出たりすることが分からない。しかし、通風患者を診ている医者はうまく診断を下してくれる。

要するに、本当の専門医、それも経験のある専門医にかからなければ、直るものも直らない。歯医者と同じで、下手な医者にかかれば、病状は悪くなる。日本であろうと、オーストリアであろうとこれは普遍的な真理だ。設備は貧弱でも、中身がない病院や医者よりも、設備は悪くても技術が確かな医者に診てもらいたい。もちろん、両方あればそれに越したことはないが、とりあえずハンガリーで難しい病気にかかったら、本当の専門医に診て貰うことだ。コネとお金を用意して。

ハンガリーとアメリカ：

生活を比較する

二村 修／手島 浩平

ハンガリー在住の皆様、如何お過ごしですか？

ブダペストの生活するに当たり、多分皆様も何の情報もないまま、こちらに赴任して来られている方が多いのではないでしょうか！？　でも、住めば都と言われる様に、多少不満があってもブダペストも悪くはないじゃないというのが率直な印象だと思います。

今回は、アメリカにて生活経験のある二村と手島でハンガリーとアメリカの生活比較をして見たいと思います。　二村は、ミシガン州バトルクリーク市（人口；５万人）で４年間（93～，96年）、また手島はテネシー州ジャクソン市（人口：２万人）で４年間（90～，93年）の生活体験から、ここブダペストでの生活体験を比較します。　アメリカとの比較と大袈裟に書きましたが、あくまで実体験に基づいた、狭い経験の中での話しなので、話し半分程度で読んで頂ければと思います。

以上、両者の生活の違いについて比較して見ました。　二村／手島共に共通しているのは、ハンガリーも良い所はたくさんありますし、一方アメリカも良い所はたくさんあります。　大切なのは、本人の心のもち方で、「あーあ、変な所へ来てしまったな」とか、「早く日本へ帰りたい」などと考えずに、如何に今の環境で、楽しく過ごす努力をすることではないでしょうか。

ハンガリーでの生活エンジョイできる様に、お互い楽しく過ごしましょう。

何か楽しい話しがありましたら、是非我々にも声を掛けて下さい。すっ飛んで行きたいと思います。

Have a Good Hungarian Life !

	ハンガリー・ブダペスト	アメリカ・田舎生活
住居環境	温水による暖房。　クーラは一部。都会にも拘らず、緑の多い落ち着きのある町。　隣家とは言葉の問題もあり、全く交流なし。　挨拶もあまり交わさない。　町並みは車文化が定着していなく、日本の様に所狭しと家が建っているので、整然とした感じがない。　最近、交通渋滞がひどくなりつつあるのが気掛かり。	全てセントラル・ヒィーティング（ガスと電気）で部屋は一定温度。田舎で隣との付き合いもある場合が多い。　通常、同じコミュニティの人と挨拶は必ず交わすし、それが自然に行われる。　１軒屋では通常２台分の車庫があり、車文化が定着している。　道から１０ｍ程度離れて芝が植えられ、町景観が整っていて快適。
買い物	96年夏以降、郊外型ショッピングセンターができ、最近では２４時間ハイパーマーケットができ、快適になった。　ブランド・ショッピングはイマイチ。　アウトレットは、オーストリア（ウィーンの手前）にあり。	２４時間スーパーがある、またショピング・モールがどこの町にもある。　チェーン店が多く、どこの町に行ってもほとんど変わらない。アウトレットは、各地にあり便利。
食材	野菜・フルーツは近年豊かになりつつある、但し品種は昔ながらのものばかり。　日本食材店ができ、ブランドの指定をしなければ、最低限のものは手に入る。　カルフォルニア米が手に入る。	日本食材店は近くにはないものの、豆腐は通常のスーパーで入手でき、野菜・フルーツは非常に豊富。　日本食材は通販でも入手できる。　カルフォルニア米。
サービス文化	未だに社会主義の時代の名残か、顧客に対するサービス精神が全く欠けている。　つり銭も投げられる始末。　徐々に変わりつつありますが・・。	スーパーで買い物して、仮に子供がいっしょにいる場合には、通常店員の人が車のトランクまで運んでくれる。　常に笑顔の応対。
自然景観	ダイナミックな景観には乏しい。ブダペストは都会にも拘らず、本当に緑が多く、静かな環境。	イエローストーン・グランドキャニオン・ナイアガラの滝等、ダイナミックな自然が満喫できる。
音楽文化	リスト音楽院を始め、オペラ・クラッシック・バレエ等本当に身近なところで音楽を楽しめる。　どんな小さなレストランにも最低バイオリン弾きがいたりする。　但し、カーペンターズの曲は弾けない。　ＦＭを通じて、結構古い欧米ポップスも聴けるが、余り曲に広がりがない。いつも同じ曲が多い。　欧米の大物スターがハンガリーに来ることはギャラの関係から全くない。	音楽はロック・ポップスを始め、多くのＦＭラジオから種々の選択が可能。　大物スターのコンサートも聴きに行くことも可能。　クラッシック音楽は、限定された場所で聴くこともできる。　但し、オペラ・バレエはニューヨーク等の限られた場所のみで鑑賞可能。
スポーツ文化	オリンピック級の種目は、水泳・水球・カヌー。　国民的スポーツはやはりサッカー。	種々のスポーツが楽しめる。　国民的スポーツは、野球・アメフト・バスケット・ゴルフ等沢山ある。
ゴルフ文化	ハンガリー人でゴルフを楽しめる人は僅か。　場所は至る所に有り余っているので、ハンガリー人もゴルフを楽しめる様になって欲しいです。	誰もが楽しめるスポーツの一つ。各地にゴルフ場があり、家族で楽しんでいる。

歴史文化	1000年の歴史。　対外的には周囲から攻められ、守った歴史。　ローマ時代の遺跡を含め、見るべきものは多い。	建国200年超の歴史は、主にワシントン・ボストンを中心とした程度で特に歴史的な建造物等は少ない。
娯楽文化	笑いの文化・皮肉の文化は根強く生きている（我々のハンガリー語では殆ど理解できないが）。　娯楽そのものは少なく、アミューズメント等はお金の関係から皆無。　但し、カジノは沢山あり。	欧米の笑いの文化は生きているものの、俗語・猥褻な言葉も多く、正当な英語ばかり勉強している日本人には難解な面も多い。　テーマパーク等も多く、子供から大人まで楽しめる。
宗教	単一民族・同じキリスト教という観点から、日本に似て　教会に行くのは老人だけ。　若者には宗教が根付いていないのが心配。	日曜日に教会に行くには当たり前。教会に行かず、ゴルフをやっているのは日本人位。　多民族国を維持するには宗教は必要不可欠
日本人観	５千年前は同じ民族、日本の経済的な成功から、非常に好意的且つ尊敬の念がある。	米国が一番という思想に捕われ、何時までも「リメンバー・パールハーバー」と言って憚らない。
日本語放送	南向きであればＪＳＴＶが入る。	我々がいた時代にやっと衛星放送を見ることが可能になった程度。
銀行文化	かつては現金商売。　最近カードが使用できるものの、相当トラブルが多いのが問題。　銀行の手数料は高く、問題。　送金・入金に２日置くなど言語道断。	小切手の文化が昔からあり、それはそれで大変合理的。　銀行は24時間ドライブスルー等で利用可能
郵便事情	個人宛の郵便物を開けて、中身を確認しようとする姿勢には閉口する。未だに人を信じない秘密警察の時代の名残が残っているのでは。	日本と変わらない対応。 自分の郵便ポストからメールを出せるのは非常に合理的。
交通事情	自動車は右側通行。　近年、ブダペストの交通混雑は著しく、市内迂回路を作るなど、根本的な対応が必要。	自動車は右側通行。　４ウェイ・ストップ、信号が赤でも右折は安全であれば可能など、非常に合理的。 道路も先を見越した建設がされる。
インターネット＆電話代	普及率40%、ＩＤＳＮ・ＡＤＳＬ等の利用も可能。　電話は昔　敷設するに時間が掛かることもあったが、携帯電話の普及もあり、今は２週間程度で入手可能。	契約により、市内通話無制限という選択肢もあり、インターネットは普及している。

補習校便り

漢字を知ると，どんなよいことがあるの？

吉原　稔祐

補習校に通う子どもたちにとって最も苦手で、時間のかかることが漢字の習得ではないでしょうか。子どもたちからも「面倒だ」「どうして勉強するの？」等、疑問に満ちた不満も聞かれます。そこで今回、「漢字を知ると、どんなよいことがあるのか」を書いて、漢字への苦手意識等の払拭のきっかけになればと思います。難しい言葉もありますが、５年生以上の子どもたちにも理解できるように書いてみます。

漢字の特性

漢字には、次のような優れた性質があります。①簡素性、②造語性、③即時性です。簡素性というのはすっきりと表せること、造語性というのは言葉をつくるのが得意ということ、即時性というのはひと目でぱっと分かるということです。このような性質は、漢字が表意文字であるからです。

表意文字に対するものは何かというと、表音文字です。平仮名や片仮名やアルファベットは、音（おん）を表すだけでです。「車」のクとルとマ、「ＣＡＲ」のＣとＡとＲは音を示すだけで、意味は表していません。

それに対して漢字は、一字一字が意味をもっているので「表意文字」といい、そういう性質を「表意性」といいます。

では、三つの性質を順番に説明します。

簡素性

例えば、いま、マイクを揺らします。微かに-弱く-軽く-強く-激しく、揺らします。

地震の強さを示す震度１から震度７は、今言った「微かに」以下の漢字を頭につけてそれぞれ次のように呼んでいます。

１微震　２弱震　３軽震　４中震
５強震　６烈震　７激震

漢字の訓読みというのは、意味を読みとるということですが、「微かに震える、弱く震える、軽く震える・・」ということを、漢字はたった二文字で表すことができ、私たちも漢字によってどれほどの強さなのかを想像することができるわけです。

長い言葉を省略できるのも、この性質の一部です。現在のＪＲは、以前は国が経営していました。正式な名前は「日本国有鉄道」ですが、「国鉄」と呼んでいました。これだけで国有の鉄道ということが分かるのです。

漢字の「簡素性」というのは、複

雑な内容を簡単に言い表す力ということになります。

造語性

２年生では「電車」という熟語が出てきますが、電気が発明され、その力で車を動かすことができるようになったので、電気の「電」と「車」を組み合わせて「電車」という言葉をつくりました。

ここは「体」を丈夫に「育てる」ためにスポーツなどを行う建物ですので、「館」をつけて、「体育館」と呼ぶわけです。このように、漢字だけで出来ていて音読みする言葉のことを漢語と言いますが、漢語はこの造語性に優れているわけです。

漢語に対するのは「和語」です。「わご」または「やまとことば」と言います。「集会」は漢語、「集まり」は和語です。

この場合は、漢語と和語がほとんど同じ意味を表していますが、こういうものばかりではありません。「歩きで行こうか」と言うとき、「歩行で行こうか」とは言いません。「体育館」も和語では言い表せません。「からだをそだてるやかた」と言っても何のことか分かりませんね。「日本国有鉄道」は、「ひのもとくにのもつくろがねのみち」ですが、もっと分かりませんね。

マイクのような「放送」や「設備」となると、和語の中には言葉がありません。むかし日本になかったものですから、それを指す言葉がないのです。

和語も言葉を組み合わせて新しい言葉をつくることがあります。「青い」と「空」で「青空」、「顔」と「色」で「顔色」のようなものですが、漢語に比べると、和語はそういうことが苦手です。

漢語でしたら、「体育-館-放送-設備-収納-倉庫」という語をつくることができます。さらに続けて、「管理-規則-検討-委員-会-会長-選出-選挙-実施-日程-表」とつなげて様々な役割や働きを表すことができます。

即時性

日本に高速道路が出来はじめたころ、どんな道路標識が分かりやすいかを研究するために、漢字・仮名・ローマ字を比べてみました。実験の結果、「あぶない」「ＳＴＯＰ」などに比べて、「危」「止」などの漢字の方がずっと速くドライバーに情報を伝えることが分かったそうです。

あなた方の勉強についていうと、教科書やノートを見て、何について書かれているのか、大事なことは何なのかがすぐに分かるということがこの「即時性」ということです。

漢字の力が付くと、役立つことがたくさんあることが分かったと思います。漢字の力が付くということは、使える漢語が増えるということです。これからあなた方が勉強して身に付けていく知識や技能や思考や認識に関する言葉の多くは，漢語で出来て

いますから、漢字の力がないと困ります。言葉が増えるということは、考える力が増すということです。成長するということです。

あなた方は、漢字だけでなく、二つの言葉でそういう力をつけつつあります。本当に素晴らしいことです。今の努力は、将来、勉強だけでなく、いろいろな力となって、自分に返ってくるということです。大変なこともあるでしょうが、補習校の勉強と現地校の勉強の両方を頑張って欲しいと思います（２００１年度補習校通信№２５・№３０より）。

補習校夏合宿

小五　太田　祥子

今日は、ひさしぶりの合宿だ。スポーツ教室でテニスをした。ゆりちゃんとももちゃんともえりちゃんと私の４人でやった。つかれたけど、けっこう楽しかった。

夜になって夕べの集いの時間になった。私たちの番になったとき、ちょっとはらはらした。クイズをいろいろ出したけど、全部知っている人がいて、なんかがっかりした。私たちの番が終わったとき、ものすごく気分が悪くなった。頭がいたくなった。どうしてかは分からなかった。

「ドラえもん」のげきでは、こうへい君がやったのび太はとても上手で、びっくりした。

のりピー＋あやかちゃんがダンスをして終わったとき、みんなが「アンコール！アンコール！」と言っていたので、私もつられてやっていたら、のどがいたくなってきてヘトヘトになった。

ただ、これを書いているとき、わかなちゃんやみどりちゃん達が遊びに来てワイワイしていたので、なんだか元気になった。だから、みんなにとても感謝している。よかったよかった。

小五　細川　萌里

テニスは吉原先生が少しコーチをしてくれて、なかなか続かなかったけど、おもしろかったです。ボーリングは何度もガータに落ちたけどストライクが一回決まったのでうれしかったです。スカッシュは初めてやったので、あんまり意味が分からなかったけど楽しかったです。

出し物はうまくできたと思います。みんなのやったものもおもしろかったです。ダンスも上手でした。島田先生が入ったり、何回もアンコールが続いて楽しかったです。司会の人もよかったです。

　他にも楽しかったことは、部屋でＵＮＯをやったりしたことです。夜もお菓子パーティのようなことをしました。少しの時間でしたがすごく楽しかったです。

　私は初めて合宿に来たけれど、すごく楽しくておもしろくてよかったです。班長さんもやさしかったです。（かぎをなくしたりしましたが・・・）また、来年が楽しみです。また、げきをうまくやりたいです。

小五　山崎　勇祐

今日は夏合宿だ。船で着いたところはかん光地みたいだ。最初、とまる所はどんな所だろうと考えていたら、所々にボートを入れる所や、つりをする所があった。そして着いたら、旧館と聞いていたけれど、そんなに古くもないと思った。へやはわりと広く、なみのホテルよりいいと思った。

　昼ごはんはグヤーシュで久しぶりにたくさん食べた。その後、テニス教室と聞いていたが、ただ遊ぶだけで教室とは無えんだった。その後はボーリングだったが、何回かやったらあきて、スカッシュをやった。

　夜の夕べの集いでは、一番おもしろかったのは「プロジェクトＸ」だった。また、最後のダンスは何回もやらされて、おどっている人たちがつらそうに見えた。

小五　横山　ゆか

今日はたくさん遊んで、とても楽しかったです。でも、もっと遊びたかったと思います。

　スカッシュは生まれて初めてだったけど、先生達が教えてくれたのでできるようになりました。とてもよかったと思います。ボーリングも生まれて初めてだったけどやっているとどんどん上手になりました。スカッシュを教えてくれた先生達にはとても感謝しています。テニスは五人もいたので、こうたいごうたいでやりました。最初は全然なれていなかったのでできませんでした。でも、ボーリングの時といっしょで、やっているとだんだんなれてきました。今日はこの三つのスポーツが体験できてすごくよかったと思います。

　夕べの集いは、す～ごく楽しかった。みんな、とてもおもしろいげきをしていました。

合宿に来たのはこれで四回目です。そして今、私は班長になっています。これは初めてのことです。きのうはどきどきしてねむれないくらいでした。でも、班長になってよかったと思います。前よりももっと楽しいように感じます。

だから、明日になるのが待ち遠しいです。早く明日になってほしいな。

小六　小野田　陽

夕べの集いは楽しかったけど、なんかさびしい気持ちもあった。なぜかというと、のりピーが帰ってしまうからだ。時にはいじわる、時にはやさしいのりピーが帰ってしまうことは、悲しかった。

のりピーとは、これまで何回か班がいっしょになったが、のりピーにとって最後の夏期合宿で同じ班になれなかったのが残念だ。いつも必ず補習校をもりあげるのりピーが帰ってしまうと、補習校がしんみりすると思う。のりピーのおばあちゃんが、たしか名古屋に住んでいると聞いたから、もしぼくが日本に帰ったら会えるかもしれない。それだけでもうれしかった。

のりピーにとって最後の合宿を楽しくしたいと思ったが、ぼくはおもしろいくないため、もりあげられなかった。のりピーにとって最後の合宿を楽しくできないのが残念だ。

明日はのりピーをできるだけ助けて、楽しい時を過ごしたいと思う。

さらば、のりピー、元気でな。しくしく。

小六　上坂　桃

スポーツの時、テニスはとても楽しかったです。スカッシュでは私があまり上手ではなかったのでまあまあでした。ボーリングは、初めはとても楽しかったのですが、最後のほうで一年生の子がやってきてボーリングの玉をむやみにひとつのレーンに転がすので大変でした。それにピンクのボール（一番軽いボール）を取り合いするので、私がボーリングをやめて面倒をみなければなりませんでした。でも、楽しかったです。

夕べの集いでは「赤いちゃんちゃんこ」のげきをしました。練習の時、私はおばけ役だったので、どうしたらこわくなるかを、ずっと研究しました。ゆりちゃんがいろいろ助けてくれたのでうれしかったです。しかもグループ名が、私が決めたのだけど「ＫＯＷＡＩ！」だったのでおもしろいと思いました。中学生がやっ

ていたダンスはあやかちゃんとのりピーがいいと思いました。私はこれまで夕べの集いが何よりいやだったけど、今回はうまくいってよかったです。

小六　清水　郁馬

初めての夏期合宿はバスに乗り、船に乗りと、いろいろな乗り物に乗って、その後も、スカッシュ・テニス・ボーリングなど、たくさんのスポーツでいっぱいでした。テニスは室外だったので雨が降り始めて少ししかできなかったので残念でした。

イベントもたくさんあり、ダンス、プロジェクトXのちょうせん者たち、ドラえもん、クイズなどなど・・・でした。中でもおもしろいと思ったのは、プロジェクトXのちょうせん者たちです。これはお笑い交じりだから、おもしろかったです。ぼくはドラえもんの役で、せりふがとても多くて大変でした。だから、台本を借りてやりました。それでも結構まちがえて大変でした。

明日はカヌーなどがあるらしいのでとてもとても楽しみです。

中一　野沢　太郎

夕べの集いはすごく楽しかったです。まさか、たったの一日で考えた出し物があんなにウケるとは思いませんでした。他の出し物にも参加したというか、割り込んだというか、どっちか分からないけど、一応参加できて良かったです。

あと、自分ではパートナーと思っていたより仲良くなれて良かったです。

スポーツはちょっと・・・久しぶりに激しい運動をしたので、今日は筋肉痛に悩まされています。

中一　村松　佳奈

今日の夕べの集いで、それぞれが出し物をした。

私の班は他の二つの班と一緒に「赤いちゃんちゃんこ」の劇をやった。船の中でも、休憩時間でもみんなたくさん練習をして、どうやったらみんなこわがってくれるか考えたり、本当に一生懸命だったと思う。私が予想していた以上にみんなスラスラ覚えてくれてこっちがびっくりしてしまうほどだった。

しかし、本番は、まあ台本通りにはできたから、みんなに拍手したいところなのだけれど、なんだかんだで観客のみんなは、こわがってくれなくて、逆にウケてしまったようだった。ちょっと的外れみたいな、複雑な気持ちだったけど、みんなが笑ってくれたなら、まあ、それならそれでもいい。

それから、先生に言っていないハ

プニングがある。それは、私が部屋のかぎをどこかに置き忘れてしまった。結局友達の部屋にあって、無事部屋に入れたのだが、自分は班長に向いていないと思う。明日の朝も起きれるかどうか、少し心配である。下手をすると副班長に起こしてもらいかねない。

今日はゆっくり寝ようと思う。

中二　太田　寛朗

夕べの集いでやった〝プロジェクトX〟は、今日船の中で、太郎と悠君と僕で考えて、それを準備時間のときに変えたものです。ほとんど考える時間がなかったし、練習も二回しかできなかったので、どうなることかとハラハラしていたけど、みんな笑ってくれたのでうれしかったです。

他の人達もすごくがんばっていたと思います。最後のダンスは二回もアンコールがかかって太郎やサブちゃん、島田先生も参加して結構良かったです。太郎は適当にやっているように見えたけど、結構みんなの笑いを取っていたので（島田先生にはじき飛ばされたりして）おもしろかったです。

ひとつ心残りなのが失敗してしまったことだけど、まあ、他は良かったです。

この夕べの集いは、これまでの三回の中で一番楽しかったです。

中二　近藤　麻実

今日の合宿は、二年前の合宿よりもとても楽しかったです。特に、夕べの集いでは、二年前と比べると出し物が良くなっていました。

一番おもしろかったのは、ドラえもんのテスト対決の劇だと思います。私もジャイアンやすねおみたいな人達をあやつれるものが欲しいなあと思いました。

一番すごいなあと思ったのは、ダンスでした。特に、ｗ－ｉｎｄｓは私の好きなグループだったので、すごく嬉しかったです。「Feel The Fate」という歌は、それほど好きじゃなかったけど。それでもすごく良かったと思います。そんなに練習をする時間はなかったのに、あそこまで上手だったので、すごくビックリしました。あと、アンコールに応えてくれたことにも驚いて、さらに先生と野沢太郎君が加わったのにもビックリしました。でも、すごくイイと思いました。

来年は合宿に来れないけど、来年もこんなに楽しい合宿になるといいなと思います。来年、こんなに楽しい合宿に参加できないのが、とっても残念です。

中二　手島　慎平

夕べの集いは楽しいこともあったけれど、悲しいこともあった。

楽しいことは、太郎の班の「プロジェクトX」。とても印象的だった。僕はここに来て、あんなすごいことをやった人達を初めて見た。特にあのプロジェクトXのポーズがとても印象に残った。しかし、それを見てまねしているのりピーもすごかった。僕らのグループはそれなりに受けていたから良かったと思う。

最後に僕達がダンスをやって、良くできたと思うけれど「アンコール」と言われ、ちょっとびっくりした。まさか、アンコールが出るとはな・・・。僕はここに来て久しぶりにいい汗をかいたような気がした。

悲しいお知らせは、秦弘典君、通称のりピーが日本に帰ってしまうことだ。今までいろいろなことがあった。でも、日本に帰ってしまうとなると、さすがに寂しい。のりピーに最後にひとこと言いたい。

「ありがとう、そして。さようなら。日本に帰ってもみんなのことを忘れないでね。日本でもガンバって！」

中二　塘　将太郎

夕べの集いでは、いろいろな笑い声が聞こえました。〝野沢太郎としもべ達〟の「プロジェクトX」ではみんなの笑いや拍手が聞こえました。一方、僕達がやったドラえもんでは、あまりにもあきれた声や顔が目に残りました。

僕とのりピー、彩香、裕也そして慎平とダンスをして、アンコールがかかったり、大きな拍手、そして笑い声が聞こえたのは、嬉しかったです。集いの後、いろんな人から「まぁ、よかったんじゃないの～」とか、「うまかった！」とか言ってもらって嬉しかったです。

実は、先週耕子さんにダンスの指導をしてもらい、少しは踊れるようになりました。多分間違いはなかったと思うけど、あまり自信はなかったです。

中三　糸木　悠

僕らにとってこの夏期合宿は、ゼロ泊二日の旅だった。

今回一番心に残ったことは、夜がとても長いということに気づいたことだ。いつもは一瞬で過ぎてしまう夜が、今回はとてつもなく長く感じた。夜の時間が、僕は全体的に過ぎてゆくのを全身で感じ取った。それは決して、眠かったからではない。

この経験を通して、僕は一日は二つの時間に分けられることを知った。太陽の代わりに月が出て、何か別の全く違う世界を映し出す。この世界を僕は初めて心から体験した。

書籍紹介

『「無限」に魅入られた天才数学者たち』（早川書房、二〇〇二年）

盛田　常夫

インターネット・ブックショップ

日本語書籍のインターネット・ブックショップができてから、本の購入が非常に手軽になった。一時帰国の度に、本屋で所望の書籍を探すが、まず一箇所で全ての書籍を入手することは不可能である。専門書などは、注文取り寄せになることが多い。その苦労を省いてくれ、かつＯＣＳ経由の注文のようにべらぼうな価格にならないところがあり難い。

インターネット・ブックショップの代表格は、**www.amazon.co.jp** と **www.bk1.co.jp** だ。アマゾンの方は買い上げ価額が一五〇〇円以上だと日本国内の宅配便送料が無料とあるから、本屋で無駄な時間を過ごす意味がなくなった。アマゾンの日本サイトでも外書を購入できるが、外国語の書籍は本場の **amazon.com** で購入した方がかなり割安だし、ハードカバー、ソフトカバー、古本などの選択幅も大きい。ハンガリーへ直接、国際宅急便で送ってもらう方がかなり安く上がるし、書籍には関税がかからない。

これまで新聞広告や書評欄で本の購入を決めることが多かったが、ネットショップを利用するようになってからは、テーマや分野に沿って探すので、書評に載らない力作や関連テーマなどに遭遇するチャンスが広がる。だから、最近は、暇な時にネットショップを覗き、どんな本が売れているのか、面白そうなテーマを扱った本がないか、散策するのが楽しみになっている。

比較的ポピュラーな専門書の売れ行きのランキングを見ていると、内容的に平易とは思われない書籍がランキングの上位を占めているのに驚く。たとえば、『ビューティフル・マインド』（新潮社、二〇〇二年三月）などは科学一般・科学者・伝記のランキングのトップを占めているが、六〇〇ページ近い分量に加え、内容的に数理経済学の知識がないと簡単に読めるものとは思われないのに、一番売れている。もっとも、これなどは映画を観た人が原作を購入するということだろうから、本棚に飾っておくケースが多いと見た。

集合と無限

同じく、科学者の伝記あるいは数学一般の分野で売れているのが、『「無限」に魅入られた天才数学者たち』である。これも、現代集合論の初等的な知識を前提としており、誰もが簡単に読める本ではないが、ランキングの上位を占めている。本当

に売れている数だけ読まれているなら、日本の知的水準も捨てたものではない。

戦後生まれの我々でも、学校教育で「集合論」を勉強するチャンスはなかった。大学生になって家庭教師を始めた頃に、集合や写像（関数）などの現代数学の基礎論にもとづく数学教科書が、中学校で使用され始めた。今では小学校からこれらの基礎概念を学び、現代数学を学ぶ基礎を獲得するように教科が組み立てられている。

数学の分野に集合論が生まれて、まだ百年ほどしか経っていない。カントールというドイツの数学者が編み出した数学の基礎概念で、ノイマンも集合論の基礎の確立にかなりの貢献をしている。カントールはもともと数論から数学研究を始めた。数論というのは、自然数、整数、有理数、無理数、実数などの「数の研究」である。ハンガリーの天才数学者エルデシュも「数論」の研究者だったが、彼はとくに「素数」論の大家であった。

カントールは数論の研究から、「無限の数の比較」という研究に入った。たとえば、自然数の集まり（集合）も整数の集まり（集合）も、要素が無限だから、二つとも「無限集合」と呼ばれる。常識的には、「正の整数の集合」である「自然数の集合」の濃さは、「正の整数と負の整数」を含む「整数の集合」の濃さより小さいと考えられる。ところが、「自然数の集合」の要素を、「整数の集合」の要素に一対一に対応させることができるので、数学的論理では「無限集合」として同等だとされる。つまり、「この二つの無限集合、自然数の集合と整数の集合の濃度は同等である」と表現される。

このように、「自然数」、「整数」、「有理数」の集合は、相互に一対一に対応し、数え上げるという行為が成り立つので、同じ無限の濃度をもつ「可算（無限）集合」と呼ばれる。

ところが、数直線の連続した線分は、自然数や整数や有理数だけでは埋まらない。その間隙を埋めるのが無理数である。そして重要なことは、「無理数の集合」は「自然数集合」と一対一に対応しない。無理数を含んだ「実数」（有理数と無理数からなる集合）は数え上げが不可能な不可算集合で、同じ無限集合でも、「自然数」や「整数」とは「無限次元」が異なる。

ここから、「無限の次元」をどうやって規定できるかという問題が生まれる。無限にも次元があるとすると、「自然数や整数の無限」の次に来る「無限の次元」は、「実数の無限」だろうか。この二つの異なる「無限次元」の間に、別の次元の無限が存在するのだろうか、しないのだろうか。存在しないとする仮説が「連続体仮説」である。カントールはこの証明

をめぐって二転三転し、やがて精神的に廃人になっていった。

「無限」という矛盾

限りが無いというのは、日常の感覚で理解しがたい。宇宙が無限に広がっている、あるいは現代のナノテクノロジーで物質を極限にまで裁断することができる。宇宙にも物質にも「限りがない」というのを納得するのは難しい。しかし、マクロの宇宙世界にも、ミクロの素粒子の世界にも、無限という不思議な世界が広がっている。こうした物理学で表現される無限は実無限で、数学の無限は観念的な無限だが、論理を突き詰めた数学の無限の世界は、物理の「実物の世界」を抽象的に映し出していると考えられる。思考を極限まで突き詰めると、物理世界の極限に至るというのも、不思議なことである。

無限に次元があり、またその次元も無限であるとしたら、世界は無限の階層から構成されていることになる。そこから結論されることは、多分、「人間は永遠に世界を完全に理解することはできない」という公理ではないだろうか。

このように割り切ると、いろいろなことが分かる。現代数学では「連続体仮説を証明することはできない」。それを肯定した公理体系も、それを否定した公理体系も構築することができる。ここでゲーデルの定理の出番になる。

「連続体仮説の証明不可能性」は、ゲーデルの「不可能性定理」、つまり「ある公理系内部で、証明不可能な定理が存在する」と本質的に同じことを言い表しているように見える。一つの世界のなかで、証明できないことがある。したがって、それを証明しようとすれば、もう一つ高い世界（公理系）へ移る必要がある。そして、それは永遠のプロセスになる。ヒルベルトの助手として、現代数学の公理体系化を推進していたノイマンは、このゲーデルの不可能性定理に大きな衝撃を受けた。ノイマンがカントールのように精神分裂病にかからなかったのは、数学の世界に留まることなく、物理学の世界に数学の応用の可能性を追求したからだろう。

「ラッセルのパラドックス」も、基本的に同じである。「すべての集合からなる全体集合を考えることができない」。なぜなら、「その集合のあらゆる部分集合を含む集合」を作ることができるからである。無限は無限に続く。

いずれにしても、「無限にも次元がある」というのは重要な視点である。それは数学の世界のことではなく、逆に現実の世界が究極の論理に反映していると理解すべきだろう。毎日、こんなことを突き詰めて考えている数学者が精神的な異常をきたすのは理解できる。凡人に生まれて良かったということか。

日本人会運動部報告

ソフトボール奮戦記

田村　敏展

「換えの靴下持ってきた？」

威勢良く五月晴れの空に溶けて行く。空には“ニールファ”の白い綿ぼうしが輪舞（ろんど）していた。カッコつけて書いているが多くの方々は花粉症の原とお解かりであろう（そうあの頃はもうみんなバカボンのパパ！その心は鼻毛が伸び出してくる）。

もうこの時期、春と言うより初夏である。少し動けば汗が大粒となって出てくる。私も大会の備品がいっぱい詰まった箱を本部設置場所に運びながら、額に汗をかいていた。グラウンドの草が朝露をきらきら光らせ、乾いた風が気持ちよく、少し若葉の濃い香りがする。今思い出せば、あの時私は一つの歌を思い出していた。白玉かなにぞと人の問ひし時　露と答へて消えなましものを

伊勢物語に載っていた気がしたが定かでない。白線引きが終わるか否かの頃、皆が集まってくる。私はその頃、グローブやらベースやら入った箱を運んでいる。何時までも運んでいる。其れだけ沢山あるのである。準備も大分、形になって来た時分は子供の声に周りが御祭り騒ぎに変わっていた。そうこうしている内に大所帯の到着が目を引き始める。その大所帯の中には宴会担当が必ずいて大きなクーラーバックを背負ってくる。“舌切り雀”の悪い婆さながらである。然し分かる！その気持ち！暑い中、冷たいビールを飲みながらソフトボール観戦。さながらプロ野球のオープン戦みたいにいい。因みに弊社では大会前に禁酒、禁煙、禁女？で何時も盛り上がる。本当に辞令の如く！然し、誰かが二日酔いで来る、之も事実である。やっぱりワクワクするんだよねー！前夜は！

各チームが練習をし始める頃、スポーツ理事に当たっている私共弊員は益々忙しさを加速させる。何をやっているかと言えば、私は同僚のO氏と共にラジオ体操の練習をした。之が意外に難しい！朝のラジオ体操の歌は歌えても肝心な体操の方といえば之が又テクニックがいる。思い起こせば、小学校の頃、ラジオ体操の歌で目を覚まし、飛んでいっては判子だけを貰って帰ってきた。

そんな事をしているうちに弊社でも練習をし始める。観客席がやけに盛り上がっていると思えば、とある大所帯ではもう飲みに入っている之もまた、大会を盛り上げる大事な一要因なのである。私は好きだ！

平均年齢の上がってきた弊社ではあまり無理をしない！とは言わない。やる時はやる。肉体が若くとも肝臓年齢は人間国宝を授与するぐらいにきている弊員達はここぞとばかりにはしゃぎまくる。然し片隅でスターティング・メンバーを仕事よりも真剣に考えている上司の姿にこの大会の意気込みを感じ、緊張感か漲る。各チームとも同じだろうがやはり、遊びも一生懸命である。遊びでないかもしれないうちの場合！ここまで書くにつれて私の日記のようになって来てしまっている。もっと全体的な御話もしよう。今回の大会はなんと２３０名を超える人達でにぎわった。之は凄い事である。ハンガリーも沢山の日本人の人たちが居ると思った。ちなみに私は御弁当係もしていたので凄さは既に知っていた。暴露本ではないので中味は書けないが。（読者にとってはつまらないだろうが）之もまだ明るい未来の在る身の上あってのこと、控えておこう。

参加チームはソフトボール１２チーム、ソフトバレー５チーム開催された。ソフトバレーは初耳の読者も居られるかもしれないので、簡単にご説明しよう！このスポーツはバレーボールだ。ただ、アタックＮｏ．１のように激しくはないが盛り上がる。キャッチ・フレーズも『誰でも、いつでも、どこでも？』とある。一言で言えば“かっぱえびせん”なのである。話を大会開会式に戻そう。まぶしい空に開会の宣言がなされ、ルール説明になった。今大会の斬新な改善がなされた。其れはフォアボールがない！！と言うことでだ。

之は凄いぞ！打つあるのみ！となる。試合の話に進めよう。

弊社は一回戦を勝ち、二回戦に進んだ。相手は音響チームである。一回戦でパワー全快、早熟な事をしてしまった弊社はバテバテ。音響チームはシードであったがために弊社との試合がこの大会一回目。首を長くして待っていたのか、水を得た魚になっていた。試合前の軽い練習にも力がこもり、球は走っている。弊社ときたら、練習なし。さー試合開始。御互いに礼をした後、先攻後攻を決める。弊社は後攻、守備に付く。私はキャッチャーをしていたのでドカベンさながらである。と自分自身だけが思っている。試合は緊迫状態を保って回を重ねてゆく。覚えているのは４回、５回と両者無得点、しかも三者凡退で進み音響チームは苛立ちを隠せない。ソフトボールの緊張感の一つは７回までしかも時間制限がある。読者の中にはいい年こいて！と思っている方も居るかもしれ

ないがこれが未だサッカーよりも野球が青春だった頃の違いである。サッカーは面白い。分かる。私も、キャプテン翼を読んでいたので分かる。然し、やはり野球は日本人の文化の一つになっている気がする。古くは巨人の星、侍ジャイアンツ、ドカベン、アパッチ野球軍、ナイン、タッチ、言い出せばきりがない。西の空が夕焼けの紅に全てが染まり、一番星が輝き始めても、各家のおばちゃんが“帰りやー。夕飯の時間やでー”といわれても公園でボールを追いかけていたしね。其れもめっちゃ真剣に。いつもどこかで野球をしていた。紙丸めてやってたり、ピン球でもやってた。学校の廊下から神社の境内まで何処ででも球場になっていた頃があるんだよね。

私にとって今回は3回目のソフトボール大会出場なのだが、今回は私の歴史に残ったね！

6回の裏、弊社の攻撃で、打順が私に回ってきた。

私は上司のN氏より“バントでもいい、走って出ろ”とサインが出た。もう甲子園球児情態、私は初球ねらいと打席に立つ前に決めていた。鮮明に覚えている。初球少し高めのような気がした。振り切らず当たるだけで、駆け出した。ただ、真っ白なファースト・ベースに向かって。頭も何もかも真っ白になっていた。“真っ白になっちまったよ！おやっさん！”の明日のジョーのように。“うちの母ちゃんに怒鳴られて、つかまったら死ぬでー”と思った、小さく純粋だった頃のように。

ベースにあとわずかと近づいた時、事は起こった。

ボールを受けるファーストのひざと私の膝上が交差した。私は思っていた、其れもゆっくりと思っていた、「このままやったらあかん！」私の瞳は飛行士のアクロバット飛行のように2回、空と地を写し、そのまま地面へと叩き付けられた。もう足が動かなかった。緊張と動揺のせいか、とっさに立ち上がり、アウトだと思ったが判定はセーフだったようでベースを譲りはしなかったものの後打者がボールをたたく金属バットの音で飛び出した私の足はもう体を支えられなかった。

スリーアウトになりベンチに向かう私は足を引きずっていた。

最終回（7回目）の表、音響チームの最後の攻撃を向かえて、泣いても笑っても最後の守備、キャッチャーの私はしゃがめない。痛みをも忘れさせる金属バットのこだまが始まった。第一打者内野安打、第二打者はレフト前ヒット、音響チームは焦

りを押さえ無理をせず、1、2塁。第三打者目を討ち取り、ワン・アウト。
第四打者目が女性でファーボールを採られ、満塁。
打順が一番打者へと回る。一球目を見逃し、2球目に手を出した。
「ファール！」
審判の良く通る声で意識を戻す。各チーム皆、ボールにしか意識がない。まさに好ゲームだ。音響チームに焦りが又出てきた。このままならどうする。引き分けか！何時もの練習の結果が出せないまま終わるのか。チーム・リーダーらしき人の檄が飛ぶ。
「カーン」
一斉に全員が立ち上がる。
芯で捕らえてない。しかし、力か！
レフトが突っ込んでくる。ボールは思った以上に伸びない、下し落としたら終わりだ。
親指を立てた審判の合図
「アウト！」
又命拾いをした。2アウトである。
「ツー・アウト」、「ツー・アウト」
「もう一丁、締まって行こう！」
N氏の掛け声一つ一つが皆を一つにしていく。
最後の打者。
打席に入る前に大きく息を吸い込む。
ベンチは静かだ。
皆の鼓動が聞こえるように静かだ。
ピッチャが降り渋った。ラスト・バッター。
白いボールは“ニールファ”の綿ぼうしが輪舞する中に吸い込まれていた。
弊社の守備員は動かなかった。
第一球目。サ・ヨ・ナ・ラ！
春が終わった。春とは言いがたいくらい初夏である。グラウンドの草の朝露は消え、益々若葉の濃い匂いが立ち込める。私はと言うと昼の御弁当だけはちゃっかり食べ足を引きずり早退。後日、病院へ行き、強度の筋肉打撲で全治一・二週間と診断され、はしゃぎ過ぎで、全身筋肉痛。
翌々の日、出社の折、同僚のO氏から結果を聞けば、強豪ＳＡＮＹＯの優勝に終わったそうである。そして、忘れてはいけないソフトバレーは小村チームが晴れての優勝、弊社のスポーツ理事の御役目もいちお滞りなく終わったそうである。
私は、ソフトボールの後、ベッドの上で痛めた足に氷を押し付け、天井を見ながら考えていた。
“秋のソフトボールは又おもろいやろなー”と。

日本人会遠足レポート

見てきました！
ハンガリーの原点

野沢　正之

今年の遠足は例年よりも少し足を伸ばし、ケチケメートの先にある【Opusztaszer（オープスタセル）歴史記念公園】への旅行です。六月一六日、朝八時、参加者三八名を載せたバスはブダペストを出発。広大なハンガリーへ平原をつき走ること二時間半、別途乗用車で向かわれた一六名の現地での参加を頂き、総勢五四名の「ハンガリーの原点への旅」が始まりました。

まず我々を出迎えてくれたのは勇壮なホースショー、馬上で刀や弓矢を使っての戦いのシーンはそういった異民族との葛藤をへて築いてきた彼らの原点を見せてくれました。お昼は野外バンガローでのグヤーシュパーティー、そしてこの公園の売り物である歴史大パノラマ‘ハンガリーの誕生’の見学と日頃はあまり体験できない「一日どっぷりハンガリー」のイベントとなりました。

折りしも現地で合宿練習中のハンガリー和太鼓クラブのパフォーマンスを覗かせてもらったり、突然の夕立に足止めを食らったりのハプニングのおまけを付けて一八時四五分、旅は無事終了致しました。

強い夏の日差しの中で見て感じてきました。何にも無い平原に民族をまとめ国を築いてきた彼らのダイナミズム。ハンガリー大平原に響く和太鼓の音色に感じた不思議な共感は我々日本人との深いルーツ…？。

今回参加頂いた皆様に今回の遠足がこの国、ハンガリーの理解に役立ち今後のより楽しい生活に少しでもお役に立てればと思っております。

今後も場所の選定、企画の内容等々皆様のご意見を頂き、より楽しいものにして行きたいと思います。よろしくお願いいたします。

【日本人会より】

日本人会事務局は七月二十日より八月十六日まで夏休となります。

実務は行っていますが、定期的に火・木曜日に事務局員がいるのは八月二十二日よりとなります。皆様、良い夏休みをお過ごし下さい。

編集室より

次号の締め切りは、九月下旬とさせていただきます。

TEL/FAX: 356-5721
e-mail:nihonjinkai@axelero.hu
電話・FAX が変わりましたので、ご注意ください。